

蒼い虎

かぶらやこうし
鋪谷嘴矢

冬の夜の週末、三人の男が私の家に集まった。

辺境の、山間の小さな谷に住む者たちが、たまに行く親睦を兼ねての集会だ。

歳は違うが、ほとんどの者が都会の生活を嫌って、逃げるようにこの土地にやってきたという事情は同じだ。

そういった孤独な者同士が、週に一度、持ち回りで、それぞれの家を提供し、酒を飲んで馬鹿騒ぎをする。

小さな谷といっても、五人にとっては十分広い。

その上、自給自足に近い生活は多忙で、普段、わたしたちが顔を合わすことはほとんどない。

そんな我々が、唯一、話題を交換しあえるのが、この週末の集まりだった。

話がひと通りすんで、軽い酔いが皆に回りはじめた頃……

「何か面白い話はないかい？ ジョナサン」

私は、ジョンが給仕をするネリスの後ろ姿をなめるような視線で追いかけるのを目にして、ジョナサン・モスに声をかけた。

他の独り者の男たちと違って、私だけは愛する妻ネリスと二人暮らしなのだ。

彼女は私のすべてだった。

この美しい女神のために、将来を囑望された演出家であった私は、都会の恵まれた生活と名声をなげうって、この谷に流れてきたのだ。

だが、暗黒街のボスの愛人だったネリスを愛したことを後悔したことなど一度もない。

それほど彼女は素晴らしい女性だった。

だからこそ、自称女性百人切りのファット・ジョンが、嫌らしい目つきで、彼女の胸や腰を見るのが耐えられなかった。

彼らが女性に飢えているのは知っている。

私としては、できるならこんな集まりに参加したくはないのだが、不思議にも、ネリスがこの集会には乗り気なのだから仕方がない。

都会で華やかに暮らしてきた女性が、毎日、判で押したように同じような田舎暮らしに甘んじているのだから、こういった、たまの催しを喜ぶのはわかる。

しかし、必ずしも紳士とは呼べない男たちを、家に呼びたがる彼女の気持ちにはわからなかったし、そのことが私を不安にさせるのだ。

今夜のように客を皆を招く時、普段より彼女の化粧が濃くなるのも気にかかる。

私は、集まった客の顔を見回した。

税理士だったというファット・ジョン。

大学で経済を教えていたというベンジャミン・ニルス。

中でも、わたしが一番心を許せるのが、ジョンナサン・モスだった。

モスは、ひよろりと背の高い青白い顔の男で、見た目は三十代後半、自称元ストで女のように手入れされた長い指先をした男だ。

私が彼を気に入っているのは、彼の文学趣味が私と似ているからだ、今回も、私の知らない、私の好みにあった話をしてくれるに違いない。

話に気持ちを集中することで、エリスに対して持つ、ぼんやりとした不安を忘れることができるだろう。

そう思っただけで私は彼に水を向けたのだ。

「そうだな……こんな話はどうだ」

期待通り、彼は椅子から身を乗り出し、細長い両手の指を合わせ、目を半眼気味にして話し始めた。

「ベスターという作家の『虎よ、虎よ!』という作品がある。知っているかい？」

男たちは一様に首を振った。

「SFなんだがね。ある宇宙船乗り——まあ船乗りみたいなもんだな、その男が宇宙で何者かに襲われ、半分壊れた船に置き去りにされてしまった。そこへ、通りかかった美しい宇宙船に向けて彼はSOSを発信するが、その船は無視して飛び去ってしまうんだ。で、それから彼の一生をかけた復讐が始まる」

「襲った奴を見つけてるんだな」

ジョンが目を輝かせていった。

「いや、自分を置き去りにした宇宙船に復讐するんだ」

「そいつはおかしい」

「まあまあ、本題はそれじゃない」

なだめるようにいってジョナサンは続けた。

「それから色々あって、結局、その男、ガリイ・フォイルは刑務所に入れられることになる。正確には精神科の病院なんだが、物語世界では犯罪者は病人という扱いなのでね」

「じゃ脱獄だな」

「お察しの通り、でも、たぶん、君の思っている通りじゃない」

「なんだよ」

「その頃の世界は、今とは違って、ある能力を、みんなが持っているんだ」

「能力……」

「ジョウント能力と呼ばれるそれは、考えるだけで、一瞬で場所を移動できる力だ」

「瞬間移動、テレポーションだな」

「一般的にはそう呼ばれるね」

「そんな能力があるなら、脱獄なんて簡単だろう」

「そこがミソさ」

そういってジョナサンは酒で唇を湿らせた。

「ジョウント能力というのは、自分がどこにいるかを正確に知っていないとだめなんだ。自分の場所と、飛ぶ先のイメージを明確にしないとできない。だから監獄は、山中の曲がりくねった鍾乳洞の中につくられているんだ」

「なるほど」

ジョンが膝を叩いていった。

「頭がいい」

「だから、囚人たちはジョウントできない」

「本当にできないのか？」

「できないんだ」

「でも……」

私の言葉を遮ってジョナサンは続ける。

「そう、中にはチャレンジする者が出てくる。あるいは、監獄の生活に嫌気がさして、死ぬつもりでジョウントする者も」

「死ぬのか？」

ベンジャミンが、かさついた声でいった。

彼は、いつも極端に死を恐れているのだ。

「ジョウントするには、飛ぶ先をはつきりと頭に思い浮かべることと、飛ぶ先が何もない空間であることが絶対条件なんだ。それを破れば…

…

「どうなる」

それには直接答えずにジョナサンは続けた。

「何日かに一度、あるいは家族からの手紙が届いた夜など、囚人たちはベッドの中で、遠くで起こる地響きに似た爆音を聞くことになる。

彼らは、そういった闇雲なジョウントをこう呼ぶんだそうだ。『ブル

ウ・ジョウント』と」

「憂鬱なジョウント、か」

「一応、ジョウントという方法は与えられている。でも、実際には外に出ることはできない。それでも、万にひとつの奇跡に頼ってトライするやつがでてくる。なまじ可能性があるのがいけないんだ」

突然、胸がざわめいて、私は彼にたずねた。

「どうしてこんな話を？」

ジョナサンは目だけで笑って答えた。

「これって、俺たちと似ていると思わないか？道路は通じている。本数は少ないが列車もある。だけど俺たちはこの谷を出られない」

「出ないだけさ」

私がそういうと、ジョナサンは私の目を覗き込んだ。

「本当に？」

私は目を反らした。

誰も口にしないが、それぞれに、谷を出て外界に戻れない理由があり、皆がそれを知っているからだ。

——ジョンは顧客に対する詐欺容疑で指名手配中、ベンジャミンは女学生に対するセクハラ疑惑で全てを失った。そしてジョナサンには殺人事件の容疑が——

「だろう？出て行く術はあるのに、それを使うことができないんだ。もし闇雲に出て行けば、十中八九、ブルウジョウントと同じで死んでしまうんだから……」

男たちは顔を見合わせ、黙り込んだ。

——また始まった。

男たちのやりとりを聞きながら、ネリスは、クスリと小さく笑った。

彼女は、もう何度もこの「蒼い」だとか「虎」だとかいう話を聞かされていたからだ。

データベースが小さいから仕方がないんだろうけど、毎回同じ話じや飽きてしまうな。

もう少し違う話もして欲しいわ……

ネリス・ハッターは、宇宙船ハリソン号の一等航海士だった。

だが、五年前、突如として襲った隕石事故によって船が大破してしまい、彼女だけが生き残った。

食料も酸素も隕石に吹き飛ばされて、そのままでは死んでしまうために彼女は、命からがら睡眠カプセルに逃げ込んだ。

不幸なことに、自動操縦装置も壊れたために、冷凍睡眠（コールド・スリープ）しながら救助を待つことはできなかった。

時折、船を操らなければ危険なのだ。

操縦といっても実際にボタンを押したりする必要はない。ただ起きていれるだけで、コンピュータが彼女の意識を読み取って、自動で操縦するのだが、そのために完全な睡眠に入ることができない。

というわけで、半覚醒半睡眠の中途半端な状態で、何も食わず話さず彼女は生き続けることになった。

しかし、人はひとりでは生きてはいけない。

事故から半年後、孤独でおかしくなりそうだった彼女は、一つの決断をする。

コンピュータの中に、仮想現実世界を作りあげ、一日の大半をその中で過ごすことにしたのだ。

もちろん、問題はあった。

コンピュータの大半が壊れ、ごく一部しか使えないため、作り出す空間が極端に小さくなることと、登場人物が数名に限られることだ。そこで、彼女は、小さな谷と、谷から出ていけない特殊な過去を持った四人の男たちを作りだし、一番ハンサムな男を夫とした。

彼の愛情をかき立てるために、彼女に秋波を送るキャラクターも作った。
「……」

彼らは、谷から出て行けないと悩んでいるが、そう考えること自体がナンセンスなのだ。

「世界も彼らの命も、全ては彼女の掌の上にあるのだから。」

皮肉なのは、彼女自身も、宇宙という巨大なものの掌から抜け出られない四われの身であるということだ。

でも……

彼女は、憂鬱そうな顔をして黙り込む男たちを眺めながら考えていた。

ちよつと気になるのは、最近になって、自分が一等航海士ネリス・ハッターであることを忘れていた時間が長くなったことね。

なんだか谷の生活が真実で、宇宙船がどうこう、というのは、空想好きな主婦の妄想に過ぎないような気がしてくるもの。

「まあ、どちらにしても違いはないわ。」

「あらあら、暗い顔をして、どうしたのかしら」

男たちの沈んだ気分を変えさせるため、あでやかな笑顔と愛想をふりまきつつ近づきながら彼女は考える。

「——谷にいても外には出られず、睡眠カプセルにいても、外部には出られないのだから。」

救助船がこの船を見つけてくれる時まで。

しかし、事故から五年経った今となつては、その望みは薄そうだった。搜索は打ち切られたに違いない。

あるいは、いつかはこの生活に疲れ果てて、私は、衝動的にカプセルの蓋を開けてしまふかもしれない。

たとえば、それが、必ず死ぬことを意味する「ブルウジヨウント」と呼ばれる行動であつたとしても。

——そのあと、男たちは、私なしでどうやって暮らしていくのかしら。

そう考えると、彼女の気持ちは少し落ち着く。

「死んだ女よりもっと哀れなのは忘れられた女」

そう記したのは二十世紀に生きた画家マリー・ローランサンだつたと思うけれど、少なくとも、彼女に関する限り、いなくなつた後、百年後、千年後であつても絶対に男たちは忘れるはずはないだろうから。

△▽